
レギオン航海記～でたところまかせの僕の旅～

桔梗谷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レギオン航海記〜でたとこまかせの僕の旅〜

【Nコード】

N7528K

【作者名】

桔梗谷

【あらすじ】

人類が宇宙進出を果たし、人類は宇宙のいたる所へと散らばった。そんな時代に少年は両親の死を契機に広大な宇宙への旅を決意する。多くの人を巻き込みながら……。少年の行く先には何が待っているのか……。何が起きるのか。それは誰にもわからない……。

イントロダクション

世界は変わった。

人類は長年の夢であつた宇宙進出を果たし、人類は己が土地を広げんとして宇宙に広がっていった。

小さな国や、大きな国が生まれた……。

それによつて新たな政治体制や、新たな勢力ができ、時には戦争も起こり、また英雄と称される人物も生まれた。

またその一方で、銀河を出て新天地を探そうと試みる者もいた。

宇宙は広い。

人類が、光より早く移動できるようになつてもそれは変わらない。

宇宙は物語を受け止め、それを眺めるのみ。

そこにあるのは、ただ人の生きた証のみ……。

人の紡ぐ物語だけなのだろうと、私は思う。

だから、私は作る。

物語の一翼を担う、その存在を……。

——マルクス・ウェル著

『風変わりな艦たち』より抜粋——

イントロダクション（後書き）

これが私の初投稿の作品となります。あらすじではそれっぽいこと言っていますが別にそんなことないと思います。……自分で言うのもなんですが。

時間があまりとれないのでも更新のペースがかなり遅いかもしれません（いえ、たぶん遅いでしょう）。

その点に尽きましてはどうかお目ごぼしのほどをいただきとう存じ上げます。

また、文章力の無さなどいろいろと至らない点等々あるかと思いますが、どうか温かく見守って下さると幸いです。

2小節目くあなたは…だれ？く

家を出る。

僕はそう決めた。これは確定事項だ。

両親が事故で死に、妹と二人きりになってしまい僕は、うんざりしていた。

なぜかという、僕らの両親はある大会社の重役を務めていたのだ。

つまり、早い話僕らの家は、金持だったのだ。

両親の死を悲しむ間もなく、遺産は相続税とやらで減り（それでも、一億ペトラほどは残ったのだが）、大人たちは僕達の遺産目当てで、集まってきたのだ。それはもう、ハエのように。

これには困った。本当に。やれ、後見人だの、遺産管理だのとうるさいのだ。

だから、この星セヴィリヤをでて、どこか遠い……。そう、こんなしがらみのない場所へ行きたかった。

「兄さん……。どうかしたの？」

さらさらとしたセミロングの金髪に透き通るような少ししたれ目の琥珀色の瞳。

ほっそりとした体に加え、きめ細やかな色白の肌で、大人しさを全身でアピールしている女の子。

僕の妹のクレアが、いつの間にかすぐそばに立っていた。

「いや、いつまでこんなこと続くのかなって…」

頭をかきながら、答える。

「さあ……。いつまで続くんだろう？」

そう答えるクレアの顔にも、疲労の色が見え、精神的に参っているのが、うかがえた。

「よし、外へいこうか、クレア。……うん、そうしよう!」

「あ、ちよっ……。兄さん!？」

僕は、顔色の優れない妹に気分転換の意をこめ、外へ出た。



青い空、燦々と輝く太陽。もうこれ以上ないというほどに晴れ渡った空に綿毛のような丸い雲が一つ浮かんでいる。

そんな、快晴の天気の中、僕は隣を歩くクレアの顔をちらりと覗き見た。

よほど、気が滅入っていたのだろう。少し、外に出ただけなのに顔色が、ずいぶん良くなっていた。

僕は、クレアの調子がよさそうなのを見計らって、口を開く。

「ねえ、クレア。僕、宇宙に出ようと思うんだけど、クレアも一緒に来る?」

「はあ!?!なにいつてるの兄さん!?!」

怒った! 予想以上にびっくりしたらしい……。まあ、いきなり言われてもびっくりするのは当然だろう。

「いや、ね。宇宙に出たら、あのうるさい人たちもいないかなって……」

「なに、考えてるの兄さん! 危ないし、だいたい、宇宙に出る必要なんてないじゃない!」

そりゃ、そうだ。なにも、大人がうつとうしいからって、危険な宇宙に出る必要はない。だけど、僕は……。

「……一度でいいからさ。あのひろい宇宙そらで、いろんなことを見てみたかったんだよ。……少しでいいからさ」

僕の勝手きまわりない言葉に不満の色を隠さず、むく顔をしめる妹。……そうだよ。なっとくいかないよね……。

……こりゃ、一人で行くしかないね。いまや、たった一人の家族だし、危険なことには巻き込まないしね……。

「……しもいく。」

「ん？」

「私も行くって言ったの！なんか、文句ある！？」
わたし

「ええええ！？なんで！？お前、今行かないって言わなかったか？」

「誰もそんなこと言ってないわよ！ぼくっとないで少しは人の話を聞いたら！兄さんがそんな調子で心配だから行くって言うてるのよ！」

失礼な。そこまで言われるほど　ぼーっとしてない。

「いやでも、お前宇宙は危険だって知ってるんだろ。いいのかよ！？」

「それを言うなら、兄さんだって危ないわよ！お互いさまでしょ！」

「そりゃそうだけど……。……。クレア、友達は？どうするんだ？」
「そうだ、こっちの生活はどうするんだ？……。まあ、僕が言うことじゃないんだけど……。」

「いいのよ。……。友達なんていないし、兄さんもそんなんだから宇宙に行くっていったんでしょ」

「……………」

「凶星なのだが……。……。それにしても、クレアにまで友達がいなかったとは……。意外だ。友達多そうなのに……。まあ、結構人見知りするし、ある意味しかたないのかも知れない……。」

まあ、それはさておいて……。

「ありがと、クレア。なんだかんだ言って行くって言うてくれて」「……うん」

僕が感謝の気持ちを表すと、クレアは照れくさそうに下を向いた。



とまあ、こんな感じで絶好の散歩日和の中、妹と二人で向かったのは、ここ惑星セヴィリヤでも、有数の規模を誇る都市ロッシにあるこれまた、セヴィリヤの中でも屈指の規模を誇る市場フィガルだ。このフィガルでは、宇宙港が近いということもあり、さまざまなほかの星からの旅行者や商人。ほかには宇宙を活動の拠点とし、宇宙で生活することを日常としている人々——「エクスプローラー探究者」——が多く訪れる。

……僕は、宇宙に出ると大層な口をたたいたが、いきなり家を飛び出すわけじゃない。クレアも言っていたが、宇宙は危険だ。なにも準備せずに飛び出すには僕には、まだ早すぎる……。

だから、フィガルには、妹の気分転換という目的とは別に、宇宙に出るために必要なものを見るところという目的もあった。

ただ、もうひとつ打算もあった。「うちあ打ち上げ屋」と呼ばれる職業なるものがあるらしいのだ。これは平たく言えば、宇宙に出るマネジメントをするようなものらしく、宇宙に出るための手伝いをしてくれるらしい。まあ、つまりはこのような人たちとあわよくば、接触できたらいいな……という狙いもあったのだ。まあ、もちろんできたらいいなという程度なのだが……。

だが、しかし。

「♪」

「ねえ、クレア……」

「♪。♪」

なんだかんだ言って、やって来たフィガルにて僕は今……。

「クレアってば!」

「……何?」

……言わなくては。たぶん、わかっているんだろうけど、言わなくちゃ……。

僕は万感の思いを込めて言い放つ。

「フィガルについてからずっと荷物持ちって、さすがにひどくな

い!？」

「いいでしょ、兄さんは力持ちなんだから。男なんだし……」

「別に力はそこまで強くないよ!男だからって力持ちだとか言うのやめて!」

正直言って、重い……。……。一体、クレアはいくつ荷物を持たせる気なんだろう……。

ただ、待っているのも辛いので、僕はこの状況は一刻も早く打破すべく口を開く。

「ねえ、クレア……いつまで買い物続けるの?正直言って重すぎるんだけど……」

「兄さんが反省するまで」

反省しなくちゃいけないこと?……何かあったかな?

「何を?」

わからないので聞いてみる。

「………はあ」

僕の答えが、よくなかったのだろうか。呆れた様子で額に手をやるクレア。よく分からないが、クレアの中で僕の評価が著しく下がっているのだけはわかる。

クレアはどこか疲れた口調で言う。

「兄さんはそんなんだからいつも……。……いいですか兄さん。いつも言っていると思いますが、兄さんは少し、心の機微というものに疎すぎます。そんなんだから………」

説教が始まった……。

30分後……

「……そんなわけです、兄さんは……」

……流石に長い。それに、ここが町の往来だということは、クレアの頭の中から消えているようだ……。正直、恥ずかしい……。

仕方ないので、強引に話の流れを変えてみる。

「ねえ、クレア。聞きたいんだけどさ」

「……………ですから……………え？何ですか？」

「いや、あのね……。なんで僕は反省しなきゃいけないのかなって……………」

僕の率直な疑問。それにクレアは。

「え、ああ、つまり兄さんは、私に事後承諾で宇宙行きの話を考えてたことを、です」

言われて納得がいく。……………事前に言ったら反対されるだけだと思っ
て、先にある程度決めていたのが仇となったみたいだ。

「ごめん……………今度からはちゃんと言うから。」

「わかってくれたのならそれでいいです。」

謝ると簡単に許してくれた。あまり、後に尾を引かないところが
クレアのいいところだ。

「で、それで。どこまで考えているの、兄さん」

「うん、宇宙に出る手伝いをしてくれる職業の人がいるらしいか
ら、その人にコンタクトをと思って……………」

「それで……………」

「うん……………」

「……………」

「……………終わりなの？」

「……………あれ？」

「あれ、じゃないわよ！？どこまで適当なの兄さんは！もうちょ
っと考えているものと思ったら全然駄目じゃない！」

怒らせてしまったようだ。いやはや、我ながら情けないね。

「もう、いいです！帰りますよ。帰ってプランの練り直しです！

……………ああ、行くって言っというて正解だったわ……………」

「はい……………」

妹の剣幕に押され了承してしまう僕。やはり、僕の評価が下がる
ことは決定しているようだ……………。

「帰りますよ！！早くしてください！！」

……重い荷物を持った兄に言う台詞じゃないと思う。
そんな事を思いながら、フィガルの青空の下、僕は急かすクレアに
応えつつのそのそ歩き始めた。
ただ、ふと見上げた空はとてつもなく青く綺麗で、この先の未来
を示すかの様だった。



「……君が、オルティス君だね。」
……現在、我が家より、数百メートル手前の路上にて。
「私はロイドというんだ。少し君と話したいことがある」
僕たちは変質者と遭遇していた。

「……えーつと。……君がオルティス・メディチ君だな？」
突然のことで反応できなかった僕たちに向けて再度問いかける変
質者。

「違います」
即座に否定。

「いやはや、君がオルティス君か。さっきも名乗ったが、私はロ
イドというんだ。少し君と話がしたい」
人の話を聞け。

「………」
「いやはや、まず言っておくが、私は怪しい者じゃない。」
「………」
「ねえ、あの……。ねえ……。オルティス君だよね……。？」

「………」
揃って無言を貫く僕たち。……でも、僕の名前も知っているみた
いだし、ずっと黙っていても事態は好転しなさそうなので、とりあ
えず適当に相手して帰ってもらうことにする。

「……何の御用でございましょうか。」

突然返事をした僕にちよつと驚いたのか、そのロイドという人は少し困惑した調子でしゃべりだした。

「え、ええ、ええと。確認の為にもう一度聞くが……君がオルティス・メデイチ君だね」

「はい。メデイチ家当主となりましたオルティス・メデイチでございます」

特別の来客用の口調で相手をする僕。特に顔色も変えず、淡々と答える。

「そうか。私はロイドだ。繰り返すようだが、君と話がしたい。」
「……わかりました。して、内容は……。」

大体予想は付いている。遺産についてだろう。そのことを予想してかクレアも特に何も言わず黙っている。

「まあ、あれだ。……私は少々特異な職業をしていてね。君達を少々手助けできると思っている」

弁護士かそれに準ずる何か、か。……押し売りはどうかと思う。

「弁護士なら間に合ってます。」

「ああ、違う違う。そのような者じゃない。」

『……………?』

予想が狂い困惑の表情を浮かべる僕ら。そんな僕らを見て、ほんの少し。ほんの少しだけだが、そのロイドという人の顔にイタズラが成功した時のような子供っぽい笑みが浮かんだ……ように見えた。

「私はね、世間一般で言うところの打ち上げ屋なる職業の者だよ」

「っ!？」

あまりのことに啞然とする僕と同じく目を見開いて固まっているクレアを見て、ロイドはさつきとは違い。今度ははっきりとわかるように笑みを浮かべ続ける。

「ふふ、びっくりしているようだね。まあ、とどのつまり、君た

ちの宇宙行きを手伝ってあげようと思ってね。ふふ、話を聞く気になったかな？」

いたずらっ子のように笑みを浮かべ、僕らに答えを促す。僕はそれに同じく笑みを浮かべ、それに応える。

「……では、外で話すのもなんですから家のなかで話を聞きましょう」

そして、僕は硬直の解けたクレアの手を取り、家への道を急いだ。迷う余地はなかった。

2小節目くあなたは…だれ?く(後書き)

この話は一楽章(これはまだ小節です)ごとで話が大きく変わる予定です(そんなに風呂敷広げて大丈夫なのかね?)。

前述したとおり、更新ペースは遅くなると思います。

また、いささか強引な展開もあるやと思います。

酷評だろうと何だろうとしてみてくださいそれでも構いませんのでどうかよろしく願います。

3 小説目く旅立ちの日にく

僕の生まれたメディチ家とは、ただ単に金持だったわけではなく人類がこの銀河系に移住してきた際になにやら重要な地位に就いていた家系だったらしくその名残が残っており、今でこそ会社の重役などを務めているが、古い言葉を使うなら『貴族』と呼ばれる身分だったらしい。……らしいというのは今ではもうそのような特権もないし、特に何かしているということでもないで知っているか知っていないかという程度の問題になってしまっている。しかも、メディチ家が具体的に何をやっていたのかということは僕は知らない。唯一、昔のことがわかるとしたら、蔵の中に何かあるのだろうが、今現在、蔵の中にはいろんなものでごちゃ混ぜになっていて時折うちの執事が掃除で中に入るだけだ。もう、ただの魔窟である。ただ、こんな家でもいいことがあって、家がとてつもなく広かったのだ。だがその代わり、掃除がとてつもなく大変で人数がとてつもないが絶対的に足りないため、家では家政婦などのお手伝いさんを幾名か雇っている。

そして現在……。

不必要かと思うぐらい広い応接間にて。

「ですから……もっと考えて行動してください！ 若！」

「……………」

僕は絶賛説教されていた……。……本日2回目である。

「……………」

その後、浮かれ気分の家へと戻った僕は運の悪いことにうちで働いている家政婦のミイヤに見つかってしまい、僕らはロイドさんについて根掘り葉掘り聞かれ、それにロイドさんが流れるようにすべて答え、結果宇宙行きの話がばれてしまい現在の状況へと至っているわけである。

うちで働いている家政婦^{メイド}さんのミイヤ・フィルチは、その年齢の

割に幼い童顔に似合わない怒りの色をその藍色の瞳に浮かべている。かなり御立腹のようだ。しかし、元が童顔なのであまり怖いとは言えなかったりする。

「……聞いていますか若!？」若というのはミイヤの僕の呼び名だ。

「………はい」

「いいえ、違います。絶対聞いていませんでした!ですから若は……」

「うう…」ちゃんと返事したのに……。

なんかもうデジャブしか感じない状況で僕はちゃっかり説教を逃れているクレアと客人だからという理由でお茶まで出してもらっているロイドさんの顔をちらりと盗み見る、と。

『………』目をそらされた……。

クレアに至ってはぷいとそっぽを向いている始末だ。

ロイドさんは目をそらしながらも申し訳なさそうな顔をしていた。……そう思うのなら助けてほしい。

「はあ、なんで若はいつもこうなんでしょう……。初めて会った時はもうちょつとしっかりしていたのに……」

ミイヤの説教が長くなりそうなので、ちょつとだけ別のことを考える。……別に説教から逃げているわけじゃない。

ロイドさんは最初こそ変質者のごとく話しかけてきたのだが、よく見るととても変質者には見えなかった。

どこか神秘的な銀色の瞳に黒い髪。そして、なかなか整った顔立ち。全身をすっぱりと覆うような黒のトレンチコート。

足まで届くそのトレンチコートだけがこの快晴の天気になぐわなかったが、言ってしまうえば、それ以外は普通であった。……つまりは勝手に変質者認定した僕らが悪いということになるわけだが。

「………つまりはそういうことです。わかりましたか若?」

「え、あ、うん」大半は聞き流していたのだが。……まあ、なんかただの愚痴も入っていたし。

「わかりましたか。なら、それでいいです」やっと終わるみたいだ。

ほっと一息ついたところで、ふと思い出したようにミイヤさんが口を開く。

「ええと、結論としては若が宇宙に行きたいというならそれはそれで構わないのですが……」

「え、いいの!？」

「ええ、若が望むのなら。それは旦那さまや奥様から何かあったら好きにさせるように仰せつかっておりますので」

驚きだ……。絶対反対されると思ってた……。僕は、今は亡き両親に感謝した。これで宇宙に行ける。そう思った。

「ですが、宇宙に行くというなら……その際私たちはどうなるのですか？」

「……………」言葉が出ない僕。

「まさか、それも考えていないなんてことはないわよね？」とクレア。

「そうだぞ、流石に今まで良くしてくれた者達に対して何も考えていないというのはどうかと思うぞ」とロイドさん。

失礼な。僕だって少しぐらいは考えているさ。

「大丈夫。いくら僕でもそのくらいは考えているさ。心配しないだよ」

『……………』

みんなの冷ややかな視線がいたい……。よほど信頼されていないようだ……。

「まあ、皆さんにはこの際に全員やめてもらおうかと……」

『考えうる限り最低の選択だあああ!？』

みんなの絶叫。意味が分からずキョトンとする僕。そんな僕にクレアが言う。

「いい、兄さん？兄さんは今まで忙しくてあまり家に居られなかった両親の代わりに面倒を見てくださった皆さんに……事もあるうにもう要らないからどうか行けっ！と言っているのも同じことを言っているのよ！？わかった！？」

「……わかった」

「……危うく外道の道へと進むところだった。……やはり僕はそういったことにあまり向いていないのかもしれない。クレアに感謝しなくては……。」

「なら、どうすればいいの？」と僕。

「そうだ。この場合僕はどうすればいいんだろう……？クビじゃないくて暇を出せばいいのだろうか？」

「そんな僕にミイヤさんが言う。」

「若！心配はいりません！私達も一緒にします！」

「はあ！？」

「衝撃の一言。いや、構わないのだが……。しかし、こうもあっさり宇宙行きを決めてしまっただ丈夫なんだろうか……？」

「それってミイヤたちも来るってこと？」とクレアがきく。

「はい！もうこうなったらネイトさんやルクレチアさんとかとも御一緒に皆で宇宙へと行きましょう！」

「ネイトやルクレチアは今ここにいないうちのお手伝いさんたちだ。……しかし、本人に確認もとらずにそんなこと決めてしまっているのだろうか。」

「少し不安になってくる僕を置き去りにして事態は進む。」

「別に人が増えること自体は構わないが……。勝手に決めてもいいのかね？」と極めて常識的に判断するロイドさん。

「いいんですよ。ネイトさんは忠誠心バリバリですし、ルクレチアさんは若のことを気に入ってますし。……たぶん大丈夫ですよ」その言葉を聞きクレアが微妙に嫌そうな顔をした……。気がする。まあ、あまりルクレチアと仲良くないからかな……。

「それなら、いいだろう」とロイドさんがすんなり納得して話が

終わる。だが、そこで何か思い出したようにロイドさんが告げる。

「だがしかし、その場合この屋敷はどうするのだね。さすがに放置というわけにはいかないだろう」

『あ………』と一同。

そこについて何も考えていなかったらしくミイヤは黙り込んでしまふ。応接間の空気が一気に重くなる。とそこで。

「でしたら、私^{わたくし}が残るといふことにしましょう」

そんな声とともに僕はいきなり、後ろから誰かに抱きしめられた。漂ってくる女性特有のどこか甘ったるい香り。背中にはやわらかな女性の肢体が押し付けられている。

……もう、何回も過去にあったことなので、特にどうかということではないのだが、それでも顔は赤くなってしまふ。

「ルクレチア………。いたのなら最初から出てきてよ……。」

声のしたほうを向くと、いつも見慣れた顔があった。僕に抱きついていたのは、蒼がかった綺麗なセミロングの髪を頭の後ろで結い上げ、琥珀色の瞳をもった見るからに大人の女性——ルクレチア・クライン——だった。

いくら身内とはいえ赤面した顔を見られるのはやっぱり恥ずかしかったので、僕はルクレチアの腕の中から体を出そうと身をよじるが、存外に力が強く抜け出せない。そんな僕のことを知ってか知らずかルクレチアはとても楽しそうに言う。

「すみません、若。ちょっと用事があったもので。出損ねてしまいました。……にしても、やはり若はかわいらしいですね。愛しています！」

「意味分かんないよ!?!全然脈絡がないじゃん!?!だいたいお客さんが来てるのに何やってるの……」

「すみません。……若が私の腕の中で身をよじっているなんて………少し暴走しました」

「……………」

……これは良くあることなのだが、流石にロイドさんの前でやられると……恥ずかしい。肝心のロイドさんなんかは軽く引いている様子だし……。なんか、クレアの目が怖いし……………」

「ルクレチア……。……兄さんに変なこと言わないで！あとそれと早く離れて！兄さん困ってるじゃない！」

「痛いっ!？」

といってクレアが僕を無理やりルクレチアから引き剥がした。ありがたいんだけど。……腕がちぎれるかと思った。助けられたんだろうけど、どこか感謝する気がなくなる。クレア、目が怖いし……。もう少し穏便にしてほしかったな……………」

「……お嬢様。そんな風に引っ張ってしまつては若の体が危険です。若をこちらに渡してください。お怪我が無いかどうか、私が見ます」

こんなことになった張本人がいけしゃあしゃあという。それにクレアは案の定反応して。

「怪我があるかないかは私^{わたし}が見ます!! ルクレチアにみさせたら、またさつきみたいに破廉恥な行為を兄さんにするつもりです!」

「あらあら、お嬢様。若が私に取られるのがそんなに嫌なのですか?」

ルクレチア……。もうやめてほしい。なんか、ロイドさんに身内の恥を見せているようで嫌だ……。ロイドさんもなんか口がポカンとしてるし……。……クレア、すごく怖い顔してるし。

そんな僕の思いをよそに二人はヒートアップする。

「だいたい、なんでルクレチアは兄さんにばっかそんなことするの!? そんなのそこらへんの人にすればいいじゃない!」

「いいえ、若だからこそ意味があるのです」

「なんで!？」

「私は若を愛しているからです」

「……………っ!」

クレアの顔がさらに真っ赤に染まる。ついでに僕の顔も……。

「な、なな、なんてことを言うのよ!？」

さらにヒートアップする二人。呆れた表情でロイドさんが額に手をやる。

「……私がオルティス君を見るけど構わんね？」

『—————』

二人はまるで聞いちゃいなかった。

もういいやといった感じでロイドさんは、口論を続ける二人とそれをみてオロオロしているミイヤをほっという僕と一緒に部屋を出た。

「いつもあんな感じなのかね？」

ロイドさんがそう訊ねてくる。

「…………お恥ずかしながら」

僕はそう返すことが精いっぱいだった……。

「…………そうか」

「…………」

「…………」

「…………」

「……荷物の整理でもしに行こうか」

「…………いいですね」

そうして僕らはいまだに大声の響く応接間を後にした。



それから30分後。

荷物の整理を終え部屋に戻った僕らを待っていたのはぐったりとしたクレアとミイヤ、それとは逆に涼しげな顔をしたルクレチアだった。

「ああ、若。先程の件ですが……」

「え、ああ……ルクレチアが屋敷に残ってくれるって話？」

さっきまでの言い争いなどなかったかのように喋るルクレチア。ソファでぐったりとしている二人のことなどどこ吹く風だ。

「ええ、その件ですが。……先ほども申しあげた通り、私がわたくしのこります」

「ルクレチアがのこってくれるのはありがたいけど……なんで？」
僕がそう聞くと少し疲れたような顔で答えた。

「……消去法です」

「消去法？」

「ええ、消去法です。だって考えてみてもください若……ミイヤはこういうことには向いていませんし、ネイトさんは現在出払っております。となると私しか残っていないでしょう？」

「そうだね……」ネイトはともかく、ミイヤがのこった時なんかは目も当てられない事が起きそうな気がする……。なんだかんだでよくドジをするのだ。

「そういえば、若はどうやってこの方と出会ったのですか？」

「え、唐突に何？」

いきなり、ルクレチアがへんなことを聞いてきた。

「いえ、立ち聞きしていたのですが、この方とどう知り合ったのがよく分からないのです。まして、友達のいない若にそのようなスキルがあるとは思えなくて」

「それは存外に失礼なセリフだね、ルクレチア！？僕だって人に話しかけるスキルぐらいは持ってるよ！」

かなり失礼なことを言われてしまった。まあ、この場合、向こうから話しかけられたんだけど……。

「ああ、それには私からお教えしよう」

ロイドさんが会話に入り込んできた。

「まあ、つまりなんだ。同じように立ち聞きをして事情を知ったから話をつけるタイミングを見計らっていたのだが、声をかけ損ね

て家の前まで、というわけだ」

「ストーリーじゃないか!？」

ストーリー行為を暴露された…………。

変質者認定は撤回しないほうがよかった気もしてきた…………。

「まあ、いいじゃないか」

とロイドさんがストーリーカーを容認する発言をする。だがしかし、説得力は果てしなくゼロだった…………。

「とまあ、とどのつまりは私がのこるということで決着がついたということではないですか?」

ルクレチアが強引に話を戻した。…………ある意味正しい判断だと思う。

「うん…それでいいよ」

「そうですね。これで私も若と会える回数が減ってしまうのですが……心配なならず大丈夫ですよ若!定期的に連絡を入れるようになりますから」

「それは助かるよ。じゃあお願いね」

「はい、承りました。……若のいない間、どうしましょうか? 若の写真でも部屋に飾っておきましょう……ふふ、若だらけの部屋」

「なにそれ!?! なんか怖いよ!?!」

なにやら、不穏なことをつぶやくルクレチアが少し怖かった…………。

「ですから若は安心して旅立ってください。……若の帰る家は私が守っておきますから」

どちらかというところと感情の見えにくいルクレチアだけど、今はその端正な顔に優しさの表情を浮かべていた。

「ありがとう」

「いえいえ、これも使用人の務め。それよりもミイヤとお嬢様をよろしく願います」

「うん」

「ネイトさんには帰って来たときにそちらへ行くよう言っておきます。……くれぐれも大事の無いようお体にお気を付けくださいませ」

そこまでいってから、ルクレチアはロイドさんに向き直り。

「若はこの通り少しちゃんぽらんでございます。ですから、どうかくれぐれもよろしく願います」

「任せてください。エクスプローラー 探究者としての心を叩き込んでやります」

ルクレチアの言葉、その重さに応えるようにロイドさんは重々しく頷く。

「ありがとうございます」

ルクレチアさんは一礼した後、すぐさまクレアとミイヤを起こす。

「さあ、お嬢様、ミイヤ。若の旅に付き合うのでしょうか？ いつまでソファに寝ているのですか？ 早く起きなさい」

荷物を持った僕らが玄関から出て行く時、ルクレチアさんがいっになく大声で言った。

「行ってらっしゃいませ！！」

僕らはそれに行ってききますと答え、家を後にした。

3 小説目く旅立ちの日にく（後書き）

前回から約一カ月が経過してしまいました。

……マズイ。時間が足りない。

私は文章を書くのが遅く、それに加え学生なので時間が学校などで取られてしまいます。

その代わりといっってはなんですが、なるべく質の高いものを、と思っています。

気長に待っててくれると有り難いです。

4 小説目く Set Up

家を出たのち、僕らはフィガルへと向かった。

宇宙港にも近く規模の大きいフィガルならば良い艦が見つかるだろうとロイドさんがいったからだ。

そんなこんなでフィガルへ着いた僕らは今、とある喫茶店にいた。

「フィガルに来ましたけど、何かアテはあるんですか？」

クレアが、ショートケーキをつつきながら、ロイドさんにそう聞いた。

「うむ、バルト造船所^{ぞうせんじょ}、という所に行ってみようと思っている」とロイドさん。

「そこなら、艦があるんですか？」

「ああ、フィガルにある造船所のなかでもなかなか良い艦を扱っている聞いてな」

「へえ」

とクレアは納得したようだった。

僕としてはなにか怖いくらいで話がまとまっていく。

「ところでオルティス君。君は船を手に入れたらどうするつもりだね？ エクスプローラーとして活動するのなら、当然星間連合へ加盟はするだろうが、どの組合に入るのかね？」

「ああ、それはもう決めています。……僕としては運送屋組合にしようと思っています」

「ふむ、運送屋組合か……。まあ、場合によっては危険だがとりあえずはそんなものだな。うむ、いいと思う」

「そうですか」

運送屋組合というのはエクスプローラーを統括する組織——星間連合——の下部組織にあたる組織だ。星間連合ではほかにも様々な組織があり、宇宙を飛び回るため決まった職を持たないエクスプローラーに一般人からの依頼を受けさせる、ということをやっている。

まあ、エクスプロローラーは悪く言えば定職に就かないニートのようなものなので、金に困っていることが多いらしい……。星間連合は他にもいろいろやっていてエクスプロローラーに様々な便宜を図ってくれるのだ。

「だが、そうだね……。運送屋組合となると仕事に食いあぶれるかもしれないな」

「ええ！？ ということですか！？」

僕はびっくりした。

そんな話は聞いたことが無い。

「知らなくても無理はない。あまりこのような事を言いたがる者は少ないからな。つまるところ、運送屋というのは大概大きなグループに仕事の流れがちになるからな。個人でやるには少々仕事が回ってこない可能性があるな」

「そうなんですか……」

さすがに僕は落胆の色を隠せなかった。

そんな落とし穴があったなんて……。両親の遺産だって限りがあるのに……。

そんな僕の不安を読み取ったのか、はたまたもとそうするつもりだったのかロイドさんはこんな事を言った。

「そんなに心配せずとも大丈夫だ。もう一つ組合に入ればいい。そうすれば仕事が見つかりやすいだろう」

「もう一つ掛け持ちって……。そんなことできるんですか……？」

「ああ、できるとはいってもそんな事が出来る組合は限られているがな」

とっさに答えが思い浮かばなかった僕にロイドさんは解答を言った。

「カルテットだ」

「？」

？マークの浮く僕にロイドさんは丁寧に教えてくれた。

「知らないか？ カテゴリが微妙な仕事を斡旋する組合だ。通称、

便利屋ともいうのだが……それはともかく、このカルテットに入れば運送屋組合で仕事が取れなかったとしてもこちらのほうで仕事が取れるというわけだ」

「本当ですか!？」

「ああ、手続きも簡単だからこれと掛け持ちしてみるといいかもしれない」

「良いじゃない。別にそんなに負担にならないんでしょ」

「若様。私もいいかと思っています」

クレアとミイヤが賛成した。こうなったら僕の腹は決まっている。

「そうですね……この際ですから入ってみようと思います」

「そうか」

ロイドさんはただ、それだけを返し、紅茶を啜った。その目にはかすかな笑みが浮かんでいるように思えた。

「まあ、そこが決まっているなら後は艦^{ふね}だけだな」

そういつてロイドさんは店員に勘定だ、と言い席を立つ。

僕らもロイドさんに続いて席を立つ。

「その店ってここから近いんですか？」

「ここから歩いて十分といったところだろうな」

「どんな店なんでしょうか……」

「兄さん! もう、早く行くわよ!」

「わかったから! わかったからそんなに引張らないで!」

こんな風に僕らはあわただしく店を後にした。

☆

「どんな船にしようと思うのかね」

バルト造船所に向かって10分。僕らはそのバルト造船所の前に来ていた。

ロイドさんお勧めのその店はとても大きく、まさしく艦を作り売

っているお店にふさわしい風格を持っていた。……………持っているのだが。

「ボロい……」

「なんか一昔前の鉄工所みたいなお店ですね」

古かった……。見た目が壮絶に古かった……。

黄ばんだその店のコンクリートの壁はところどころ中の鉄骨が見え、さらにはときどき中から罵声のようなものが響いてくる始末であった。

「なんか時代が違う気がする……」

そのクレアの弁に激しく同意する僕とミイヤをしり目に、ロイドさんは臆することなく建物の中に入っていく。

「あれ？」

ところどころ赤錆びの目立つ建物内へと足を踏み入れた僕たちは意外にもきれいな建物内の様子に拍子抜けしてしまった。

外見よりも強度を優先したのだろう、だがしかしむき出しの金属の壁は鏡のごとく磨き抜かれ、触れて汚してしまう事すらためらわれた。そんな建物のラウンジに店員と思しき一人の男が立っていた。

「ようこそ。バルト造船所へ。歓迎します」

男はそう慇懃に言う。

「本日は何の御用件でございましょうか」

「ああ、船を一隻買いに来た。何かいい艦は無いか」

「ああ……はいはい。少々お待ちを……」

ロイドさんが、僕の代わりに店員に掛け合ってくれた。

……………僕何もしないけど大丈夫なのだろうか。

一瞬そう思い不安になってしまったが、そんな僕の心情にきずいたようにロイドさんが僕にウィンクをした。それを見た僕の不安はいっぺんに吹き飛んでしまった。

……………ふしぎな人だ。会ったばかりの僕にここまで親切にしてくれるなんて…………。

それは仕事だからという理由なのかもしれない。だけど、そう思わせる何かその打ち上げ屋にはあった。

「お待たせいたしました。こちらになります」

冊子を持った店員が戻ってきた。

「こちらに記載されておりますが、現在、当造船所で製作または販売しているものとなります」

そう店員に言われ、冊子を開く僕たち。

「へえ、意外に種類があるんだ」

とクレアがぼつりと言った。事実それには2、30種類程度の艦がのっていた。この規模の店でこれほどの艦を扱っているところは稀らしい。

「既に完成している艦はどのくらいありますか」
と店員に尋ねる。

「製作中のものを除くと、このくらいになります」

明らかに若すぎるどう見てもお金なんか持って無さそうな僕に訊ねられ、少し面くらったような様子を見せたが、すぐに表情を整えそう応じると店員はカタログに丸をつけていった。

この対応はプロ意識のなせる技なんだと密かに感動した。

「実物を見せてもらえますか」

カタログの半分ぐらいにつけられた丸を見てロイドさんがそう言う。

それに「わかりました」と、店員は答え、奥へと歩いて行った。

これぐらいなら直接見た方が早い、そう言ってロイドさんは席を立つ。あわてて僕らも立ち上がり、二人についていった。

☆

店員について行き、その区画に足を踏み入れた瞬間。今までの雰囲気と違う光景に身震いしそうになった。

鏡面の輝きが消え、すすけた感じの鈍色の光景が広がる。

艦を作っているのだろう。辺りに響く金属と火花の鳴らす雑多な音は時折響く怒声と混じり、まさに造船所といった雰囲気をかもし

だすのに一役買っていた。

「また、造船所らしい所ね」

クレアがぼつりと言う。多分皆も同じことを考えているだろう。見るものを圧倒する熱、というものをこの場所は持っていた。

「じゃあ、順番に端から……」

「なにやってんだ、お前！？今日は一般人は立ち入り禁止と言わなかったかぁ！！」

いきなりの怒声がゴロゴロと響き、僕らは思わずびくつとしてその場に固まってしまった。

「お前。今日は特に作る艦が多いからって一般人は立ち入り禁止じゃと言わなかったか！？何やってんだお前！」

「いやいやいや、言っていましたけど親方。……それは昨日の話です」

いきなりやってきた男の人は此処の主らしい……。

「……あれ？」

「……」

「……昨日？」

「昨日です」

ただの勘違いのようだった……。怒られ損である。

「……」

「……」

「いや、違う。俺は確かに言った。そう今日の朝ぐらいに！」

……なんか発言を捏造しだした。

「いやいやいやいや。言ってますんって。今日は娘さんと喧嘩して娘さんに逃げられただけでしょう」

「……っ！！」

……凄い事言い始めた。逃げられたのか娘に……。

「だってよう。だってよう。俺の……俺の可愛いナディアがよう。」

……『お父さんウザい』って言ったんだぞ。出てったんだぞ。これが飲めずに居られるかってんだ。……お前今日付き合え。絶対に」

「はいはい。解りましたからお客さんの相手してください」

「絶対だな？絶対だぞ！」

親方（名称不明）の中で決着が付いたようだ。

親方がこちらを向く。

……ゴツイ。

なんかアホみたいなり取りが目が付いたが、親方さんはごつくて大きかった。

「すまねえな、こんなみっともねえところ見せちまって。俺はエンリケ・バルトってんだ。ここの責任者みてえなもんだ」

「僕はオルティス・メデイチと言います」

差し出された手を握り返す。

「まあ、お詫びと言っちゃあ何だが、俺が案内してやるよ」

「ええ、親方がやるんですか。製造中の船はどうするんですかい？」

「んなもん、当然後回しだ！全員客人のもてなしをしろ！！」

オオオ——！！！！と周りで雄叫びがした。

なんだか騒がしい事になりそうだ。

☆

そんなこんなの大騒ぎをしながら、艦を見ていた僕は一つの艦の前でその歩みを止めざるを得なかった。

重厚で且つ頑丈、またそうでありながら一見そうは見えず繊細さを感じさせる流線形のフォルム。

———欲しい、そう思った。

僕はこれでも物に対しての欲求は強くない方だと思っている。お金だけはたくさん持っていたからだろう。……欲しい物はすぐに手に入ってしまう。

だが、そんな僕が欲しい、と思った。……この艦を。

「あの!!」

おもわず大声が出てしまう。

「ん……? どれにするか決まったのか?」

振りかえる一同。ロイドさんが訊ねてくる。

「はい……これにしたいと思います」

僕の指した艦に目をやる皆。

「これはクラシック艦だな。艦種は特殊戦艦。タイプ エキストラマルクス・ウエル
つつう奴が作った艦だな」

解説をしてくれるエンリケさん。しかし、特殊戦艦なんて艦種は
まったく聞いた事が無い。戦艦の類なのだろうか?

僕が艦種タイプに詳しくないだけなのかもしれないが……。まあ、戦
闘で活動するつもりは全くないので、宇宙で活動出来ればいいので
戦闘機能などは特に高スペックでなくても良いのだが。

「しかし、これでいいのか? 100年は前の艦だぞ?」

「100年!?!」

クレアとミイヤが仰天する。無理もない。僕だって驚いた。……
声が出ないくらい。

普通、100年も前の艦と言えば、かなりの時代遅れで型はとも
かく大概是廃棄されてスクラップになっているはずで、こんな所
に売られている事なんて滅多にないはずなのに……。

「まあ、流れてきたやつだからな。100年も前のやつだし
いろんなもの古いぜ」

「これ、ホントに大丈夫?」

「キッチンはあるんですかねえ……?」……いくら古いって
いてもそれぐらいあると思うけど。

「流石に艦船防護装置も古いからなあ。つっても取り換えりや
すむが、金が増しになるぜ」

艦船防護装置シールドシエルシステムについていうのは一種のバリアで、艦船をデブリなどの
衝突から艦を守ったりするためのバリアを張るシステムで、強力な

☆

そんなこんなで艦を買った僕ら。古いといってもやはり艦一隻はそれなりの値段だった。カードで精算し、バルト造船所から立ち去ろうとしたら、エンリケさんが見送りに来てくれた。

「貴方の旅路に幸あれ」

宇宙で出会った人々が交わすその一言と共に差し出された手を握り返し、ありがとうございますと返す。

立ち去る時、こちらに手を振っているエンリケさんを見て大きいなど一言思い、手を振り返した。

「ところで名前はもう決めているのかね？」

ロイドさんが唐突にそう訊ねてきた。僕は何を言っているか一瞬分からなかったものの、なんとなく言いたい事が解った。

「艦の名前ですか？実はもう決めている名前があります」

「ホントですか!？」

「もしかして名前考えてて他の事考えて無かったとかいうことなの？」

辛辣な物言いのクレア。……心当たりが無いとは言えません。

「ふむ。どのような名前かね」

「ええ、昨日からその事ばかり考えてて……」

昨日から一日中考えたことをいざ、お披露目しようとした瞬間……「ねえねえ。キミってさ。艦長なの？造船所から出てきたよね？」

突然の闖入者によってお披露目は中止となった。オレンジ色の髪。明るい人懐っこそうな表情を浮かべた顔。……誰？

「へえ……」

なんか僕の顔をぺたぺた触ってきた。

「ねえ……………」

ぺたぺた。

「ねえッたら……………」

ぺたぺた。

「……………」

ダメだ。話を聞く気が無い…………。

「…………兄さんが困っているものでやめてくれますか」

どこか棘のある声音でクレアが謎の少女に詰めよった。…………なんか怖い。

「え！？あ、ああ。ごめんね！」

少女はクレアの言葉に隠された針には気づかず、さっきまで僕の顔を触っていた手を離し、誤魔化すように顔の横で手を振った。

「そ、そうだ。ねえ、キミって自分の艦持ってる艦長でしょ？あの店から出てきたんだったら、そうなんでしょ。アタシ、ナディア・バルトっていうんだ。よろしく！」

「…………よろしく」

差し出された手を握る。…………クレアの視線がわずかにきつくなつたような気がする。そんな事も気にせずナディアと名乗る少女はここにこ笑っている。

「ねえ、キミさ。艦長っていうんならさ……………アタシをその艦に乗せてくれない？整備士として」

『！？』驚いた顔のミイヤ。目を大きく開いたクレア。

「ふむ…………」いたって冷静なロイドさん。

「……………」僕はと言えば、名前のお披露目はまた後かな…………と脳裏で思い浮かべながらもまわり始めてきた僕の世界に期待を抱きながら、相変わらず満面の笑みを浮かべる少女の顔を見て、僅かに顔が緩むのを抑えられなかった。

4 小説目くSet Upく(後書き)

前回より相当な期間が立ちました。反省はしています。ごめんなさい。

自分の中にある言葉がうまく言葉にならない……もったいい表現は無いのか。そんな事ばかり考えて書いています。

話自体はかなり長くなると思います。書ききれないと思ったら、削るかもしれません。あまりやりたくないですけど。

長い目で見てくださいと幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7528k/>

レギオン航海記～でたどこまかせの僕の旅～

2010年10月10日20時30分発行